金責めシスター

玉子王子著

一章　訓練覗きに金責め協力要請

　中世ヨーロッパ風のよくあるファンタジー世界……

　ヤナッボーの街の南の農村、そのさらに南に広がる森に面した小さな修道院トパコでは多くのシスターたちが農作業等を行い、自給自足、売って作れない物を買ったりもしている。

　トパコ修道院は森の横に建てられ、少しずつ森を切り開いて周りを畑にする開墾作業を行っていた。修行の一種であり、ある程度切り開けば売り渡して新たな修道院を建てる金にして、また修行のために離れた場所の森の横に建て……という感じのサイクルを続けていく予定だ。

　そういうわけで、修道院の周囲には畑が広がっている。石で囲われた畑の間の道を馬車がいく。

　一頭引きで、御者台に一人、横をもう一人が歩いている。

　御者の男が下に声をかける。

「おいチャロソ、シスターたちをからったりするなよ」

「わかってますよ」

「ほんとにヤバいからな」

「はいはい」

　適当に頷く二〇前の男チャロソ。目はきょろきょろ、とてもちゃんと聞いている感じではない。

　――男がいないところで女が大勢暮らしてる……むしろ手を出だすの待ってるだろそんなん。出さないほうが怒られるって。

　一頭立ての馬車。馬車というより荷車を引いたチャロソたち二人が修道院の門をくぐる。荒野に女だけで暮らしているのだ、ちょっとした石の壁で囲まれている。

　修道院の中に入る二人。

　チャロソにとっては初めてである。

　――ここが女の園……でへへ、仕事で来てなきゃ……ポロンとチ〇ポでも見せたくなるな。そしたら男日照りどころか、男を知らないお嬢さんたちは真っ赤になって興味津々で見てきたりして……

　どうしようもないことを考えつつ、案内のシスターについて廊下を行く。石の床を歩く。

　壁は白い漆喰だが所々剥げてレンガが見えている。全体的に薄暗い。燭台が所々あるが、蝋燭は消えている。蝋燭は貴重なのだ、昼間からつけてはいられない。

　空気がよどんで感じられる。かび臭い。空気があまり動いていない感じだ。

　壁が長いのに気づくチャロソ。

「なんか、窓少ないですね」

「女ばかりだからな、侵入者が来るかもしれないし、冬には燃料節約する意味もあるんだろう」

　前をいく若いシスターは特に話すこともないのか黙っている。

　シスター服は紺色のロングスカート調で、袖だけ白い。そして白い肩までの筒状マントをつけている。

　――下どうなってんのかなあ。

　どうしようもないチャロソ。

ちょっと飾りのついた扉の前で止まる案内のシスター。ノックすると、おはいりなさいと少し年上の女性の声。

中には、修道院長。

頭を下げる連れ。

「どうも、おひさしぶりです。ほら、チャロソも」

「ええ……おおっ」

思わず声を上げるチャロソ。

修道院長。当然シスター服。四〇半ばぐらいで、ぶかぶかな服ながら多少腹が出ているらしいこともわかるし、頬の皺も結構目立つ。しかしもともとは美人だったとわかる美熟女だし、何より胸元。

――乳デケエ。頭何個分だよ？　やっぱり熟女は爆乳に限るよな。

と、目線に気づく修道院長。

――あら、この子私のオッパイに目が……うふふ、この子一〇代よね？　やっぱり私もまだまだいけるわねえ……こんな子供より若い子に、オッパイ見られるんだから。

「院長さん、仕入れは大体いつもの感じで」

「わかりました、値段は……」

「チャロソ、先に積み込み済ませておいてくれ」

値段はどうあれ、お互いに取引はすると決めているようだ。

若い修道女が出てきて、男に頭を下げる。

「ご案内します」

「ああ」

にんまり。

――おお、やっぱり若いほうがいいよな。オバンより。

唇を舐めつつ、後を追う。

途中で、一つの部屋の前を通る。

訓練室である。

分厚い扉の向こうには、一〇人ほどのシスターがいた。

訓練室では、格闘訓練が行われていた。

一七歳ぐらいを頂点に、一三かそこらまでいる。

二組に分かれて見合っている。

半分は、最近この修道院にやってきて、この訓練も始めて受けている。

部屋は院長室よりかなり広く、床は土だ。訓練場なので、倒れても大丈夫にされていた。

窓も多い。薄暗いと訓練しにくいとの配慮。

外につながる扉もあり、明り取りか半ば開いている。

シスターたちは訓練中だが、シスター服のままだった。いつもその恰好なので慣れておこうという意味もあるのだろう。

「それでは、格闘訓練を始めますわ。いざというときには、自分で身を守らないといけませんから

ね」

　上品そうなシスター。赤い長髪に青い目、かなり大きめの胸。名前はファキティー。

　ファキティーが数日前入ってきた一五の少女とシスター服の襟首を掴み合う。

「接近戦になったら、こうやってとにかく組み合う事ですわ」

　年上だったり、小さいころからいて歳は若いが先輩だったりといろいろな経験者たち。

　未経験者と組み、膝。

　前に押し出すように蹴る。

　押し付けるような感じだ。

「こうやって蹴るのです、ほら、そっちもなのです」

　十かそこらのシスター。幼いころからいるので先輩側に分類される。キヌシャ。青いおかっぱのような短髪。活発そうだ。

　押す様な蹴りも素早く、相手の蹴りも腰を引いてかわしたりする。

　まあ、かわし切れないが。

　ボスボスと、股間に膝をぶつけ合うシスターたち。

　先輩らは意味を理解してやっているので真剣だが、未経験者らは首をかしげる。

「あの……これじゃ力の強い男の人には勝てないと思うんですけど」

　言われて一瞬不思議そうな顔をするファキティー。上品そうな顔つきなので怒ったり馬鹿にしたりという感じには見えず、軽い困惑に見える。

「説明してませんでしたわね。むしろ、これこそが男性に勝つ形ですわよ。離れて殴り合うほうが力比べになりますが、これですと、ほら」

　ファキティーが、今日から訓練を始めた同じ年くらいのシスターに膝を押し付ける。蹴りといえないような蹴り。

　先ほどと同じものだ。

　蹴り、グリグリと股間をこする。

「あ、ちょ」

　グイグイと、ロングスカートの前を押されて顔を赤らめるシスター。

「何でこんなところ、こんなの効きませんよ」

「うふふ、そりゃ、わたくしたちには効きませんよ？　でも……男性には、ねえ」

　幼いがベテランのキヌシャに目を向けるファキティー。頷くキヌシャ。

「なのです」

「え、あ、そうか」

　気づき、今日から始めた者たちが顔を赤らめ、見合わせる。

　意味を知っていた者たちはニヤニヤしながらその姿を見ている。

　小柄というかまだ子供といえるキヌシャが自分の股間を撫でる。

「あなたたちも当然知ってるはずなのです、ここに来る前に、周りのクソガキの見たことある子がいるかはしらないのです……でも、知識としては「女の子だからしらなーい」とは言わせないのです。ここは男の目がない、女だけの場なのです」

　聞かれて、顔を見合わせる後輩たち。年齢的にはキヌシャ以上で、性交経験者すらいる。見たことがないものなど一人もいないが「はい、男性器ガン見してきました」とは言えないのが女である。

「いやその……」

「ねえ、そんなの」

「もう、ここにはわたくしたち女しかいないのですから、そういうのはよろしくてよ」

「そうそう、女だって、皆知ってるはずなのです。男の前では誤魔化しても、男の股になにがあるか。一番若い私でも知ってるのです」

「あは、そりゃね、知らない女なんていないっての」

「隠せてないよー、あんたらの、そのお股の変なモノ」

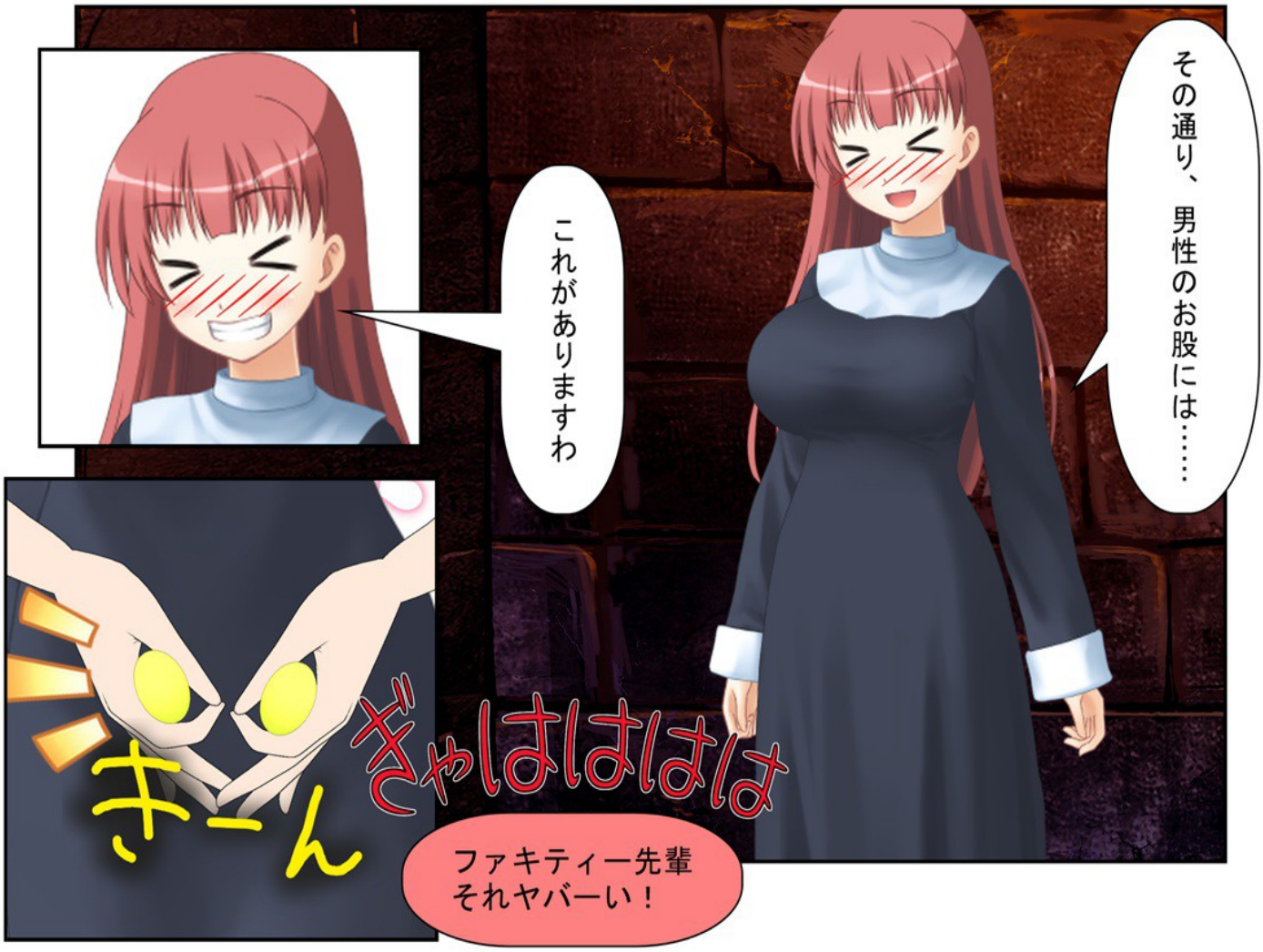
「その通り、男性のお股には……これがありますわ」

顔つき的には上品そうなファキティーが、スカートの前で指リング二つ作ってみせる。

にんまり笑った顔はそれでも上品「そう」ではあった。

そのギャップもあってか、噴き出すシスターたち。

「ぎゃはははは！　ファキティー先輩それヤバーい！」



はしゃぐ後輩、いや、同じ先輩たちも手を叩いて盛り上がる。

女だけだという気安さで盛り上がっているが、実はこの訓練室は外ともつながっている。

そこから、近くの村のいたずら少年が入り込んできていた。

キヌシャの友人で同じく十歳である。

友人というか、いたずら仲間というか。

それが、開けっ放しの外への扉の横で息を飲んでいた。

――嘘だろ、キティー姉さんがあんな、玉の形……いや、玉とは限らない、いや、玉だよな絶対。知ってるんだ、あの人も……っていうか、みんな笑ってる。みんな知ってるのか、女はここを。お、俺は女の股の事なんて全然しらないのに……あ、キヌシャも。が、ガキのくせに。

同年輩のいたずら相手も当然のように受けているのを見て妙に恥ずかしくもなる。

正門のほかにある、通用口は鍵もかかっていない。

少年、エラゾはそこをいつものように通り、この訓練室の前に通りかかったわけだ。

そして見せられる、聞かされる。

男の急所を狙うことを想定した訓練を、女の園の中で秘密裏に行うシスターたちの姿を。

そして彼女らが笑いながらやっている**男性器談議**を。

「知ってるよね、そりゃ」

「マタンキアンド、シンボル棒ー」

「うふふ、それはそれとして、この辺の村の若い方で、一番立派なの、誰だと思われます？」

「やっぱあいつでしょ。って言うか、男って不用意過ぎるよね、おしっこでチン〇ン丸出し。そのくせサイズの優劣を女に隠してるつもりで」

「え、隠してるです？　知り合いの腐れチ〇ポどもはみんな私の横でもおしっこしてチ〇コ丸出しなのです。特にエラゾっていう腐れおチンチ〇は半分の年の子の半分のおチン〇ンの分際で揺れないポコチンを形の上ではブラブラさせまくってうざいのです。実際は全く揺れてないのです」

「ぎゃはは、あいつら平気でその辺で丸出しおしっこするくせに、気持ちとしては隠してるのよ、サイズは男のトップシークレットだからね」

「無茶苦茶なのです」

「だよねえ、すぐ丸出しにするのに！」

「男はサイズを隠してる。だけど女は知ってる、だれのチ〇ポがご立派で誰のチ〇ポがお粗末か」

　笑うシスターたち。年上の方の者たちほど大笑い。キヌシャら若い側は半ば雰囲気で。

　年かさの者たちが、シスターとしての年季を無視して集まり、盛り上がる。

「わたくしの見立てでは、村長の息子さんで、わりと威張ってらっしゃるあの方のムスコが最小最有力候補ですわ」

「威張ってる奴大体小さいよね。ここでもそうなんだ」

「そうですわ。うふふ、本当にあの方のお粗末で……この前強引に誘ってきた時、ここの前でこうやって「こんなもんですわよね？」って示して差し上げたら、しょぼくれちゃってかわいそうでしたわ」

　一物の大きさを親指と人差し指の間の幅で示し、股間の前にあてるファキティー。

「えー、そんな小さい野郎いるんだ」

「エッチしてない奴に正確なチン〇ンサイズ示してやったら大人しくなるよね。なんで知ってんだよーってね、ショックなんでしょうね」

「チ〇ポは機密でボールは弱点、なのに男ってなんでついてる自分のほうが偉いみたいにおもってんのかなー、ハンデじゃんねー、明らかに」

「まあそういう事ですので、これからも男性の前では適当に恥じらいつつも、争いになれば容赦なく狙い撃ちにいたしましょうね、コレ」

　上品そうなファキティーがにんまりしつつ再び睾丸しぐさ。

「タマタマはポーションで一番簡単に完全再生する臓器ですわ。なので遠慮なく潰しちゃって構いませんわよ。タマタマ再生用のポーションなんて、普通のポーション作った廃液ですからね、ここだけの話、ビンのほうが高いですわよ、アレは」

　ポーションという魔法の薬は修道院でも作られている主力商品だ。いいのを作るにはそれなりの材料もいるので大体は傷や風邪薬、そしてごく弱い気休め程度の傷薬。

　そのごく弱い物が、不思議と男性器周辺を高速で完璧に癒すことはよく知られていた。それは男たちにとっては万が一の安心を意味し、女たちにとってはそこそこの理由で睾丸を粉砕してもかまわない理由となっている。

　ちなみに、実は女性器周辺も同じように癒すが、女性器を破壊するサイコパスはあまりいないのでその辺はあまり知られていない。

　と、ファキティーが手を叩く。

「はいはい、それではキ〇タマ潰しの練習再開ですわ」

「ぎゃははは！　キ〇タマ潰し！」

「そうそう、潰して差し上げますわ、二個とも。キ〇タマ潰してやりますわ。女の子と本気で喧嘩したり、争う男性なんて男性とは言えませんから、タ〇キン集中攻撃。さあ皆さんも思い切って、ポーションで再生させつつ、二三回潰しちゃいなさい」

　笑いあいながら組み合うシスターたち、密着してろくに攻撃できないが、膝をお互いの股間にぶつけ合う。

「あ」

「あは、あたった。でも全然平気」

「本当に男の子ならダメージになるのかな？」

「試させてくれる子がいればいいんだけど……」

　聞いているエラゾの股間がキュンキュンに縮み上がる。

　――や、ヤベエ、ここで見つかったら……下手すりゃ実験台に……キヌシャなんか、いつもの恨みを晴らそうと、これ幸いといつも以上の玉狙い撃ちしてくるに決まってる……

　と、影。

　振り返るエラゾ、一七歳ぐらいの背の高いシスター、細身で遠くから見れば少年ぽい。緑の髪は短め、目つきは鋭い、名前はキリナ。幼いころから修道院にいるベテラン勢。

　鍛冶職人の娘だったが、父親が浮気して家を出て行ったため、母は実家に戻り、彼女はそちらでは引き取れないと修道院に送られることとなった。

　と、それが十年前。

　彼女を引き取れないといったのは母の兄。

　さらに修道院に入ってすぐ、院の外で一人薬草摘みをしているとき変態男に襲われ、危うく犯されかけた。

通りかかった修道院長が変態を体が持ち上がるほどの金蹴り一閃で泡を吹かせて――院長はおっとりした爆乳熟女だが、見た目に寄らず元冒険者で荒事が得意だった――事なきを得た。

気絶した変態はその後修道院にさらわれ、数日間シスターたち総出の金責め祭りの主役となった後解放さた。

いい練習になったといえたのは直接被害にあわなかったものたちで、彼女としてはたまったものではなかった。

そして今。

「お前、何してる？　覗きか？　ガキのくせに男ってやつは……」

「あ、こ、どけえ！」

思わず殴り掛かる少年。

拳を払い、右手で胸倉を掴み、体ごと吊り上げるキリナ。

「あ、はぐっ！」

ぎゅむ、と空いた手で少年の太ももの間、男のふくらみを握り込む。

「あ、ちょ」

「ったく、男はこれだから……年上だろうが、背が高かろうが、女なんか簡単に倒せるって？　俺様には、これがついてるからっ？」

「ふぐっ」

吊り上げ、首を絞める。少年の足が力なく揺れる。

首を締められれば何とか助かろうと手をつかむしかない少年。無防備な股間を握り潰されても、足を締めるぐらいしかできない。

「や、やめえええ」

「ほれほれ、タマタマもない出来損ないに、おキンキンを握り潰される気分はどう？　男なら置けるけど、女では……なんて舐めたこと言える？」

叔父にそういわれた幼い日の記憶。

数日は叔父の家で厄介になった。十近く年上の従兄の少年がこれがないからダメだと、自分のモノを見せびらかしてきた。

泣きながら金的をパンチし、倒れたところをしつこく踏みまくって両玉を踏み潰した。

――男なんてみんな同じ、自分勝手で偉そうで……こいつをやられりゃめっぽう弱い。仕返ししようにも、私ら女はタマタマがないから、どうしようもないと来てる。このガキも確かよくキヌシャからかってる結構生意気なクソガキだったけど、おキンキンを握られたらなすすべ無し。お。

ペン、と少年の苦し紛れの蹴りが仁王立ちのシスターの股間に当たる。シスター服はロングドレスのような感じなので、足を深く入れて蹴り上げるのは無理だが、前から浅く蹴るのことは可能だ。

しかし、可能だったらどうという事もないのが、股間無敵の女の子様である。

にんまりと、むしろ嬉し気なシスター。

――金責め中に男から股間攻撃されるのは、わりと嬉しいんだよな。だってお互い同じことしてるのに……こっちは余裕、相手ははぐうはぐう。どっちが優れてるかこれ以上ない形で示せるもんね。あはは、こいつもいい顔してるな。「効かない！？　そうか、こいつマタンキ無い！　っていうか、股間蹴っちゃった、蹴り返される、タマタマ蹴られる！」って感じ？　受けるわ。

「あらあらあ？　今何かした？　お股蹴った？　馬鹿だねえ、お股蹴りなんて攻撃じゃないよ。ここは別に弱点じゃない、私ら女の子様はね。あんたらとは違うの。ダサくてよわーい、いんのーなんて肉袋の中に、人体最弱の二つのミートボールブランブランさせてる、クソオス君たちとはねー。生き物としての頑丈さが違うのよ。あんたらは、痛みに弱くてキ〇タマあーる。私らは、痛みに強くてキ

〇タマなーい、どっちが強いかは言うまでもないでしょ？　ほら、答えてみな」

　少年を下し、足をつけてやる。胸倉も肉玉も掴んだまま。

　せき込み、腰を引きつつ、少年は年上女子を見上げる。

「お、お……」

「お？」

「女が男より強いわけ……あぐあああああ！」

「キ〇タマ潰れろ、キ〇タマ潰れろ、キ〇タマ潰れろ、クソガキ男子君のおキ〇タマ潰れろー。ったく、おっそろしいわこんなガキの頃から、**おチン〇ン主義のフグリ玉系男子**だなんて。これはこの場でマタンキ潰しとく以外にないねえ、すべての女のために」

　ゴリゴリと手の中で二個玉を押し潰しつつ弄ぶキリナ。

「あおおおおおお！」

「え、どうしたのです？　キリナ……きゃっ！　ぎゃはは！　エラゾ何かしたのです？」

「お前ら覗いて、私殴り倒して逃げようとした」

「わー、そりゃヤバいのです、うふふ」

　満面の笑みで友人男子の耳元に口を近づけるキリナ。

「いつも「女のくせに」っていってるですよね？　女を見下してくれるですよね？　でも、女はね、女の子に握られただけでそんな汗びっしょりで震えるような弱点ぶら下げてないのです。うふふ、いっつも女のくせにって言ってくれるあんたに今日も言ってあげるのです。男のくせに女に逆らうからマタンキ潰し食らうのです。いつもみたいに、タマタマたーっぷりかわいがってあげるのです」

「く、くううううう、はうっ」

　キリナが金握りをやめ、吊り上げもやめる。

　膝をつき、崩れ落ちる。

　股間を抑えて丸々エラゾ。

「ふんぐううう」

「きゃは！　芋虫みたい！」

　手を叩き、笑うシスターたち。誰もかれも半笑い。

　棒で殴られまくって倒れたというなら皆心配し、同情する。

　しかし「睾丸を握られた」というのは、女の身には想像もつかない打撃で、何とも言えない、半ば冗談のような印象を受けざるを得ない。

　笑いつつ、しゃがんで顔を覗き込む女児シスターキヌシャ。

「ねえねー、金ちゃん痛いのです？　金ちゃん痛いのです？　ねえキ〇タマが？　キ〇タマが痛いのです？　ねえねえ」

「ぐむうう、う、うるせえブスっ！」

　キヌシャはかなり可愛いほうである。が、だからといって「ブス」発言に怒らないわけもない、的外れだが、腹は立つ。

　怒る、というよりニマニマしていたのが急に真顔になり、呆れ顔に変る。

「へー」

「キヌシャ先輩、こいつで練習しましょうよ」

　年上の後輩がニヤニヤ。

「えー、ちょっと、ガキじゃん」

「いやいや、私だってお腹殴るとか顔殴るとかさあ、そういう酷いことはできないよ？　でも、お股よお股、それも膝でボスボス押す程度の蹴り、大したことないって」

「ひいい、ま、まて！　股はやめ……あ」

　腕をつかまれ、引き上げられる。

　膝を締める姿を見て、噴き出すシスターたち。

「ぎゃはは、なにそれ」

「タマタマガード！　お股をガードなのです！　これが男の絶対防御なのです！」

「弱点付いてる側の生き物は大変ですわねえ」

「えへへ、怖いのです？　怖いのです？　これからね、ここにいるみんなで、エラゾのだーいじな弱点だけ狙い撃ちにしていくのです、キンキンキンキーン、なのです」

「や、やめて……許して！　はぐっ！」

「キンッと」

　ぱぐ、と鈍い音を立ててキヌシャの小ぶりな手が、カップの形でエラゾの縮み上がった股間を包み込む。衝撃が逃げ場なく、睾丸にじんわりと襲い掛かる。

「ちょっと弱すぎなのです？」

「く、くふううう」

「あは、そうですよね？　タマタマは弱いのです。みんな聞いてほしいのです、こいつ、いっつも威張ってるけど、この前同じ村の五歳ぐらいの女の子たちからかったら、キ〇タマばっかりパンチされちゃって、それでこいつどうしたかっていうと、土下座して謝ったのです、玉だけは許してって……」

「えー？」

「さすがに嘘でしょ？」

　半信半疑のシスターたち。顔を赤らめ、目を伏せるエラゾ。

「そ、それはお前が玉ばっかり狙えってそそのかすから……」

　その返事ににんまりする女児シスター。

　周りで、年上のシスターたちが顔を見合わせて満面の笑み。

「やだ、五歳の子たちに！？」

「タマタマ狙われると男性ってどうしようもないですわねえやっぱり」

「それじゃ、私達みたいに体格でも負けてる相手にタマタマ狙われたら絶望じゃん」

「男性同士ならこの子のほうが「地力で負けてるけど逆転狙える側」になれますが、ざんねーん、わたくしたち、ついてませんから」

　スカートをバサリとめくり上げる。目を剥くエラゾ。女のまったいらな股間が薄い布一枚隔ててしっかり形を見せ付ける。

「う、うううう」

「どう思います？　坊や？」

　ファキティー。上品そうに見える女が、スカートを捲り上げている姿にもはや違和感は感じないエラゾ。

「お、俺のほうが膨らんで立派だ……こんな平らな股間なんてクソ……あぐっ！」

「はいキーン」

　パシン、と払うように股間を叩く。別の場所なら大したことがない威力。しかしファキティーはよくわかっていた、その程度の威力でも十分、男の急所にはダメージが出ると。

「ぐ、ふぐうううう」

「あは、腰グネグネしてる」

「キ〇タマダンスよ」

「男はねえ、玉を蹴られりゃ腰を振る」

「えー、なんで？」

「なんでなの坊や？　お姉さん、ガチで教えてほしいですわ」

「し、知るかよ……はぐっ！」

「口の利き方に気をつけないとだめですわよ？」

「ふんぐうううう」

「うふふ、タマタマをやられた男性の顔……たまりませんわ」

「ほんじゃ、膝で押したらどのぐらいおキンキンが痛いのか、未経験者に実感させるための練習台になってもらうのです」

「や、やめ……あぐっ！」

「はいっと。うわ、グニュっとしてる。きもいわー」

　十五ぐらいだが、最近入ったばかりのシスター。押す様な膝蹴りをエラゾの股間に押し込むが、金的の威力にまだ半信半疑。

「でも、さすがにこの程度じゃ……」

「くふおおおお」

「えー？　やだ、これでその顔？」

「絶対盛ってるっしょ」

「これが、盛ってないのです。マタンキは、ガチで弱いのです」

「そうかなあ？　こんな蹴りで」

「あぐっ、や、やめろクソマ〇コ！」

「はー？」

　蹴ったシスターより、むしろ周りが気色ばむ。というより、蹴っているシスターは「まあ弱点？　蹴っちゃってるから怒るわなそりゃ」という思いがあり、今一つ「ざけんじゃねーぞマタンキ！」などと目を血走らせる気にはなれない。

　その煮え切らない仲間を押しのけ、別の未経験者が膝をゴリっとエラゾに蹴り込む。

「おらっ！　どうだ男の子様！」

　――やだ、膝になにか、硬柔らかい球体が……コリっと逃げた、コリっと逃げた！　これ、逃げられずに、うまく抑え込まれたら、この腰骨に押し付けられてブチュっと……いや、さすがに潰れないか、こんな蹴りで。っていうか面白い感触なんですけど！　もういっちょ！

「ぷぷぷっ、ほれ、金ちゃんキック。コリっと」

「あがっ！」

　目を剥くエラゾ。噴き出すシスター。

「あがっ、だって！」

「この金的顔がいいのです！　私はこんな顔一生しないでいいんだなーって、女である幸福を噛み締

められるのです。ほれ、いつも通り、もっと面白い顔見せるのです」

　キヌシャがぺちぺちと頬を叩く。

　叩きつつ、蹴ったシスターを見る。

「っていうか、そんなに強く蹴らなくても大丈夫なのです。押すぐらいで十分「はぐっ」ってくるのです。まあ、実戦じゃ当然おもっくそですが、今日は練習なので、大事にこいつのマタンキ使ってあげて欲しいのです。まあ、潰れてもポーションはいっぱいから、どうってことはないのですが」

「キ〇タマ治すポーションが副産物として大量にできるとか、これもう神様が「遠慮なくキャン玉潰しちゃえ」って女の子に言ってくれてるんだよね」

「な、なんで女にだけ……」

「そりゃ当然なのですよ？　男同士だと、自分が潰されちゃうかもって遠慮するのです。その点私らはほら……この通りなのです」

　パン、と股間を思いきり掌で叩くキヌシャ。

「ついてないです、ゴールデン。フグリがないのでお股は無敵！　なのです」

　実際の所、女であっても股間は頑丈という事もない。ただ、男の股間と比べると一億対一ぐらいの大差があるので、相対的に無敵といっても差し支えはない。

「な、なにが無敵だ……蹴られたら痛いだろ？」

「そりゃそうなのです……でもそっちはデコピンでも痛いですよね？」

「え、デコピン？」

「マジですかシスターキヌシャ」

「マジなのです、マジ、こいつら自分の金ちゃんに、思いきりデコピンできないらしいのです。怖いらしいのです」

「ちょ、デコピンできないって！」

「ぎゃはは、弱すぎでしょ！」

「弱すぎるのです、こいつらのお股って！　だからいざってときはここだけ集中攻撃なのです。ってわけで、練習練習、なのです！」

「ひ、ひい……や、やめろやクソマ〇コ！」

　ほぼ、「どうぞ練習台にしてください」といっているも同然の叫びをあげるエラゾに、首をかしげるキヌシャ。

　――こいつマジな話、タマタマ攻撃されたいです？　変な話ですが、そういう変態野郎いるらしいのです。ま、どっちみちやることは決まってるのです。

　キヌシャが黙ってみている間に、未経験者がエラゾの前に詰めかける。

「ほれほれ、キンキーン、これで効くの？」

「ぐふおおおおお」

「ぎゃはは！　マジ効いてんじゃん！」

「でも、大人にも効くのかな？」

「試してー！　誰か口実くれないかな！」

「くれるよ、私ら見ると「男に飢えてる」とか妄想こいて、ポコチン見せる奴とかいるから」

「ぎゃー！　頭おかしいじゃん！」

「マタンキ磨り潰してやろうぜ」

「っていうか「あいつら男に飢えてるんだな。せや、チ〇コ見せたろ！」ってどういう思考回路なの

よねえ」

　笑いあいながら、交代でエラゾの股間を蹴りまくるシスターたち。蹴るというつもりすらない、膝を押し込む程度、自分たちなら何ともないので、遠慮も何もない

　泡を吹きぐったりするエラゾだが、その痛みを理解できる人間はその場には誰もいなかった。

　ついには腕を引っ張られても立てなくなり、本格的に崩れ落ちるエラゾ。

「あららー」

「流石にこれ以上はかわいそうですわ」

　始めの一発目からすでに可哀そうだろうがよ、と突っ込む男はこの場にはいない。いても、金責めの餌食になるだけであまり意味はないだろうが。

「それじゃ、汗もかいたし、仕事に入るのです」

　シスターには毎日それぞれ仕事が割り振られている。

　それに動き出すシスターたち。

　訓練所に、最後まで残っていたのは男嫌いで背の高いシスターキリナ。

　男の命を女に狙い撃ちにされ、泡を吹いて倒れた男児を見下ろしてにんまり。

「うふふ、子供とは言え……やっぱり女に急所をやられた男を見るのは気分がいい。男と女、どっちが強いかはっきり示された感じでな」

「う、ううう」

「お、まだ意識があるのか。フフフ、頑張れ頑張れ男の子、頑張れ頑張れフグリ玉」

　心底楽し気に金的嘲笑かましつつ、エラゾの顔の前にしゃがみ、膝を開く。蹲踞という相撲の構えのような恰好。

　そうしつつ、ロングスカート状のシスター服の裾をめくり上げる。

「うっ」

　むっちりした太ももと、白布で覆われた女の股間が目の前に。

　と、その布をくいっと横にずらすキリナ。

「ふふ、よく見ろ。女のここ。女のお股。女のお・ま・た。お前ら男と違って、余計な物がついてない、すっきりまっ平。膝をぶつけられたぐらいじゃなんてことはない、頑丈なお股。うらやましいだろ？　倒れてるのが私だったら、お前はこんなことできないだろ。最後の力でパンチされたら、あがっ、で一発逆転だもんな。でも、私はできる。この通り、おキンキンがないから」

「くううう」

　唇を噛むエラゾ。

　――く、悔しい……なんで男だけ一方的に狙われる急所があるんだ。それに比べてこいつら、なんてすっきりした股間。俺が同じことしたら、握り潰されたり噛みつかれかねない、でも、こいつらそんな心配一ミリもいらないんだ。一生この、急所痛とは絶対無縁の生き物……

「あっ」

　と、急に近づいてくるキリナ。手を伸ばす。身動きできないエラゾの股間に。

「な、なに……」

「タマタマ潰れてないか確認だよ。多分潰れてないだろうけど。うふふ、かなり腫れてるね。念のためにコレ」

　ポーションのビンを開け、口に当てる。女たちに蹴りまくられて腫れ上がっていた肉袋が瞬く間に縮む。

「ふふ、治ったな。タマタマの数確認。キ〇タマ一つ、キ〇タマ二つ。玉確認ヨシ！」

「はうう」

　小ぶりな竿ごと手の中に収め、文字通り揉み解して弄ぶ長身シスターになすすべがないエラゾ。

　唇を舐めるキリナ。

　――金袋を握られて不安げな男の顔もたまらないな。

「ほらほら、そんな顔するなよ。確かに私は、今すぐこいつを握り潰して男終了にしてやれるけど。そんなことしないからさ」

「は、はう」

「あははは」

　男嫌い。だからこそ思った通りの反応を引き出せた喜びも人一倍のキリナだった。

体験版終わり